

さわやかトカラ情報

一隅を照らす十島の教育

発行元 十島村教育委員会
〒892-0822 鹿児島市泉町13番13号
Tel 099-227-9771
E-mail toshima-ky@tokara.jp

九月・・・初任の気持ち(未熟の自覚)

十島村教育長 原口 英典



毎月発行しているこの「さわやかトカラ情報」紙。この紙面の一つに、「十島村の小・中学校からのメッセージ」というコーナーがある。十島村の各学校に勤める先生方が、島の学校に来る前、来てからの気持ち、そしてここでの感動や学び・偏見からの脱皮などを綴っている。教師として、また、人間としての揺らぎとともに、そこでの生活が作り出してくれる確かな変容を率直に綴っていて、十島村の存在そのものに感化を受けたその先生の、大いなる存在が遺憾なく語られている。

今年の八月号には、中之島の牧角養護教諭の一文が掲載されている。先生は、期限付養護教諭として、小宝島分校に勤務経験があり、正規職員として2校経験後、改めて十島村に赴任されている。その熱き志には、胸を打たれる。

先生は、養護教諭でありながら、十島村ならではの給食の食材の注文や検収等の仕事も担わなければならない中で、次のような学びをされている。「少しばかり養護教諭の経験があっても、それ(食材の注文)は、役には立たず、何も分からず、不安ばかりだった初任の気持ちを思い出させてくれる貴重な経験になっています。」と。

『初心忘るべからず』という言葉があるが、未熟であった時の最初の試練や失敗をこそ『初心』と受け止めるとき、その時の乗り越えようとした心を、その後の、そして今を生きる「糧」につなげていこうとする牧角先生の在り方に頭が下がる。

二校目には、二校目の『初心』があり、三・四校目にも、三・四校目のその時々『初心』がある。いつまでも未熟であり続けようとするのが、実は、完成への道を、着実に歩き続けているということなのだろう。メジャーリーグのイチロー選手が4,000本安打の記録を達成したという。彼の記録達成の原点も、『初心忘るべからず』であり、未熟の自覚の日常化に立った弛まざる、人知れずの努力が成し得た結果と思われる。



二学期が始まった。それぞれが『初心』を大事に、新たな試練に挑戦していきたいものだ。

朝顔のしづかにひらく折目かな(片々子)

【合同学校訪問～中之島小・中学校】



9月10日(火)に、鹿児島教育事務所と村教委との合同学校訪問が、中之島小・中学校にて実施されました。今回は、玉川県教育委員も参加されての訪問となりました。一隅を照らす教育実践が、複式ならではの苦心とともに確実に展開されており、「一座建立」という池邊校長先生の精神が満ちておりました。

【平成25年度ファミリー劇場】



(悪石島ファミリー劇場) (口之島ファミリー劇場)

9月7日(土)に口之島、悪石島。9月15日(日)に宝島で十島ファミリー劇場が開催されました。開催に当たり、御支援、御協力して下さった皆様ありがとうございました。10月以降開催の島の皆さん、どうぞお楽しみにお待ちください。

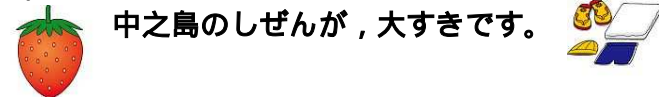
シリーズ 十島の学校にやってきて
中之島小学校 小3年 藤谷 依風希

中之島に引っこしてきて、とてもうれしかったのは野いちごをたくさん見つけたことです。たくさんある場所を、中之島生まれのお母さんにおしえてもらいました。

もう一つうれしかったのは、夏になって、毎日泳げることです。西のおんせんの下の方で夕方になるといつも泳ぎました。おとうとやいもうともいっしょです。

いとこが、あそびにきたときも、いっしょに泳ぎました。

中之島のしぜんが、大好きです。



シリーズ 山海留学生として学ぶ
成長した自分
小櫻 斉生 現在高校1年生<鹿児島県>

もちろん会長としての仕事は簡単ではありませんでした。しかし、先生方や分校の生徒が全力で協力してくださり、段々とみんなを引っばっていくことができるようになりました。さらに気づく力や周りに目配りすることができるようになりました。

この島に山海留学する前、僕は新しく物事を始めたり、挑戦したりすることができませんでした。しかし、たくさんの自然や人に触れることで新しく物事に挑む意欲が高まりました。そしてその挑戦により視野が広がり、気づく力が身につきました。

島の雄大で厳しい自然、その自然と共存して力強く生きていくことを教えてくださった島民の方々、一緒に協力して分校を盛り上げてきた児童生徒と指導して下さった先生方、そして自分が山海留学するために力添えをして下さったたくさんの方々に僕は感謝しています。そして僕を息子同然に育てて下さった里親や、僕の山海留学を快く受け入れてくれた母親にもまた感謝しています。

僕がこの島でこんなに成長できたのもすべては自分の周りの皆様のおかげだと思います。いつか島に帰った時は何らかの形で自分にできる恩返しをしたいです。

この島での成長を生かしてこれからの人生を歩んでいきます。本当にありがとうございました。

【子どもたちの作品】

(南日本新聞「若い目」H25.6.24)
天国でも元気でね 宝島小学校 4年 飯田 輝星

学校に来た時に、先生たちが図書室の前に集まっていた。見てみたら、アカショウビンが窓ガラスにぶつかって、倒れていた。「後から元気になって飛んでいこう」と思っていたけれど、2時間たってもまだ倒れていた。みんながまた集まり、ショック死だと分かった。

ぼくたちは、かわいそうだと思って先生と一緒に、心をこめておはかを作った。友達にきれいなお花をつんで、おはかに入れた。土を入れて、上に葉っぱをのせて、手を合わせた。ぼくはおはかを作っている時に、自分の命も大切だけれど、人の命も大切にしたいと感じた。

アカショウビンが天国に行ったら、ぼくたちを見守っていてほしい。家族もまた、大切に見守ってほしい。ぼくがもしアカショウビンだったら、その人を大切に見守ってあげる。

アカショウビン、天国でも楽しく、元気に頑張ってるね。生まれ変わって、もし人間になったら、一緒に遊んでね。



【コンクール受賞】
「第24回KKB硬筆コンクール」：6名
<宝島小中学校小宝島分校>
金賞：森文音(小6)、森清香(小3)
銀賞：東真優(小5)
銅賞：岩下孟司(小3)、東桃香(小3)
清水宏太郎(小5)

十島村の小・中学校からのメッセージ
平島小・中学校諏訪之瀬島分校 教諭 白石 健二

私は来年の3月で定年を迎える。一抹のさみしさとともに35年間の教員生活の最後を諏訪之瀬島で迎えられる本当に自分は幸せ者だという想いを抱きながら残された日々をあたたかく過ごす毎日である。

50歳を過ぎて教員生活のゴールが見え始めたときに『最後は離島で終わりたい』という想いがふつふつとわいてきて、それから毎年離島への転勤希望を出した。しかし、なかなか叶えられず57歳の時にやっと希望がかない、最後の3年間を諏訪之瀬島で勤務することになったのである。

なぜそれほどまでに離島にこだわったのか、自分自身よくわからなかったのだが、島で生活しているうちになんとなくわかったように感じている。私は、これまで自分が教師として歩んできた道程を振り返り、人間として価値のあるものだったのか確かめたかったのだ。言い換えると、それだけ不安だったのだ。私は、これまで何か価値のあるものを残してきたのだろうか。

そんな時、心に浮かんだのが30歳を過ぎたばかりのころ赴任した徳之島での生活だった。つまり、離島は自分を見つめる、あるいは見直すことのできる場所だということに漠然と知っていたのだと思う。

そんな私がこの島で学んだことは『我慢しないこと』である。我慢には限界がある。だから我慢を続けると苦しい。しかし、我慢せずにありのままを受け入れてしまうと実に楽しく暮らせる。そして、自分なりの工夫・改善をしてそれがうまくいくとさらに楽しくなる。それは島での生活の話だけではない。教育も然りである。

教職員であるあなたへのメッセージ

ここには現代の学校教育が置き去りにしてしまった大切な何かがあるように思えてならない。それは何かと問われても明確に答えることはできないのだが、例えば人間が本来持っている知識欲や向上心から発生した疑問や学習意欲に応える教育だったり、生活をより豊かなものにするを目的とした活動だったりするかもしれない。いずれにしても目の前の子どもたちをありのままに受け入れ、そこから始まる楽しい教育がここにはある。

